



人権教育実践報告会発表作文集

はばたき

第39集
平成27年度



埼玉県教育委員会

はじめに

「埼玉県の人権作文は、長い歴史があるのですね。」「子供たちの素晴らしい感性に涙ができました。」「子供たちの作文発表に感動しました。」……人権作文にはこうした多くの方々からのあたたかい声が寄せられます。

この「はばたき」は、昭和五十二年に第一集を刊行して以来、今年度で第三十九集となります。これまでに掲載された作品は千百二十六点で、今年度だけでも約三十六万人の児童生徒の応募がありました。長い年月にわたり、多くの方々の御協力の上にこの作文集があることを、あらためて感謝申し上げます。

この中には、児童生徒の豊かな感性を通して、日常生活のさまざまな差別や偏見に気づき、互いの人権を尊重するためにどうしたらよいかを、深く考えることのできる作品が載せられています。前向きに力強く生きようとする子供たち一人一人の生き方と、心の琴線に触れるような体験が詰まっています。それは、私たちに感動と勇気、そして希望を与えてくれるものです。この人権作文が、学校や地域・家庭等で広く活用されることを願っています。

すばらしい作品を応募してくださった児童生徒の皆さん、御協力をいただいた保護者の方、御指導をいただいた学校の先生方、刊行にあたり御協力いただいた編集委員の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成二十八年二月

埼玉県教育局市町村支援部人権教育課長

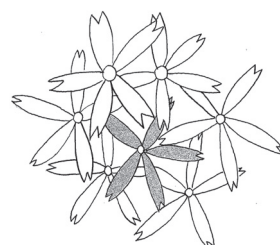
長谷川 雄一

も く じ

はじめに
文集を読むみなさんへ

小学校の部

となりのせきのおともだち	小二	2
わたしのひいおばあちゃん	小二	4
人の気もちを考えよう	小二	6
やさしいことばのまほう	小二	8
なかよくできたよ	小三	10
わたしはみんなにやさしくできたかな	小三	12
ペルテス病になってわかったこと	小四	14
町で見かけた思いやり	小四	16
大好き、大きらい、でも大好き	小四	20
耳の聞こえない いとこ	小四	24
おじいちゃんにもらったもの	小四	26
支えてくれる友だち	小五	29
おばあちゃんに出会って	小五	32
ぼくの宝物	小六	34
ダウン症のAちゃん	小六	37
その一言に込めた気持ち	小六	40



中学校・高等学校・特別支援学校の部

障害者差別	中一	44
高齢者にやさしい社会	中一	46
言葉は鏡	中一	48
私の心の友	中一	50
海を渡った僕のランドセル	中一	52
自分らしく	中二	53
人と違うということ	中二	56
人それぞれの個性	中二	58
心のバリアフリー	中二	61
ベンチからの支え	中三	64
今の自分にできること	中三	66
支えて応援する	中三	68
現状	高一	70
私の弟	高一	72
友達の大切さ	高三	73
自分を見つめて	高三	75
私が逃げていたこと	高三	77
作品掲載者一覧		79
編集委員一覧		80

文集を読むみなさんへ

一 この文集には、次のようなことが書かれた作文をのせています。

○ 「自分も、ほかの一人一人も、みんな大切ないのちをもった人間なのだ。」と考えている。

○ 人間が人間を苦しめている「まちがい」に気づき、ゆるしてはならないと考えている。

○ まちがいを直すために、自分はどうしたらよいか、どんな学級や社会にしたらよいかを考え、行動しようとしている。

二 作文を読んで次のことを学びとり、自分の問題として考え友達と話し合ってみましょう。

○ 作者が、自分となかまとの生活についてありのままくわしく見つけていること。

○ 「へんだな。」「これでいいのだろうか。」「と思った点について、いろいろな立場からよく考え、自分の意見を

のべていること。

○ 作者や文中に出てくる人の、どんなところがすばらしいか。また、どんなところが不十分なままになっているか。

三 この文集から学んだことをもとにして身の回りのことからを見つめ、作文を書いてみましょう。

○ 書くことを通して、ふだんぎもんに思っていたことをはっきりさせ、それについて自分の考えをたしかめる。

○ 自分のまわりの人の考え方、生活のし方について気づいたことを、できるだけくわしく書く。

○ 書いたことをもとに、「人間を大切にし、ともに生きていく力」をもった人間になるよう努力する。

掲載作品の中には、一般的には当事者を蔑視したり差別したりするような言葉が使われているものもありますが、作者の意図を尊重し、一部原文のまま掲載しています。

小学校の部



となりのせきのおともだち

小 二

わたしは、となりのせきのAくんには、いやなことをされたことが何どもあります。言い合いになって、ほっぺたをパンツとはたかされたこともあります。Aくんがわたしの言っていないことを、

「Bちゃんが言った。」

と言ったとき、まわりにはいた友だちが、「Bちゃんは、そんなこと言う子じゃないよ。」

と言ってくれました。みんながそんな風に思っていてくれてうれしかったです。家に帰ったら、先生から電話があり

ました。先生から、友だちに顔をたたかれたと聞いたお母さんは、びっくりしていました。お母さんは、その時、「Bは、Aくんの楽しいできごとをいつもにこにこえ顔で話してくれるので、Aくんのことには、好きだと思いますよ。」

と、先生に話していました。

つぎの日、先生は、クラスのみんなの前で、

「Bちゃんは、いやなことがあっても、友だちのわるいところではなくて、いいところを大切に思ってくれているだね。そういうところが、いいなあ。」

と言ってくれました。わたしは、先生にほめられて、とてもうれしかったです。家に帰ってから、そのことをお母

さんに話したら、

「きらいって思うと、その子もBのこ
とをきらいって思うんだよ。でもね、
その子のいいところを一つ一つさが
して、その子をすきって思うと、そ
の子もBのことをすきって思ってく
れるんだよ。だから、Bも、Aくん
のいいところをたくさん見つけられ
るといいね。」
と言われました。

わたしは、Aくんのいいところをいっ
ぱい知っています。おもしろいところ
や、むずかしいかん字をたくさん読め
るところ、やさしいところもたくさん
あります。

今はまだ、けんかをしてしまうこと
が多いけれど、Aくんのいいところを

見つけて、もつともつとなかのいい友
だちになれたらいいなと思います。

わたしのひいおばあちゃん

小 二

わたしのひいおばあちゃんは、とても年をとったので、左耳が聞こえません。いつもひいおばあちゃんの右耳の方で、みんなが話をするようにしています。わたしも、ひいおばあちゃんのことです。わたしの、話をする時には、右耳の方で話しかけるようにしています。

ひいおばあちゃんの左耳が聞こえないことがわかっていても、たまに右耳の方で話をするのをわすれたり、小さい声で話してしまったりすることがあります。そんなとき、ひいおばあちゃん

んはちよっとこまったような顔をします。わたしは、ひいおばあちゃんと一緒にいても気もちよく話せたらいいなと思います。

ひいおばあちゃんを見てみると、耳がふつうに聞こえる人よりも、一生けんめい話を聞こうとしていることがわかります。だから、左耳のふ自ゆうなひいおばあちゃんが、なるべく声やいみがわかるようなくふうをします。たとえば、右耳の方で大きい声で話したり、わたしの手や体をつかっている感じがしたわるといいます。

ひいおばあちゃんにとって、左耳が聞こえないのは、大へんだと思っています。でも、わたしたちがひいおばあちゃんの気もちになつて、聞こえる

ように話せば、ひいおばあちゃんはその
んなにこまることがないと思います。
これから、ひいおばあちゃんと楽し
く話をしたいと思います。

人の気もちを考えよう

小 二

「買い物をしてくるから、ここでまっ
ていてね。」

「うん。」

わたしは、お店の外のベンチにすわ
ってまっでいました。そこに、年をと
ったおじいさんがやってきました。

しばらくすると、おじいさんは立ち
上がろうとしましたが、なかなか立て
ませんでした。わたしは、だいじょう
ぶですかと声をかけようと思いました
が、どきどきして声がまったく出てきま
せんでした。わたしは、声が出ないので、
知らないふりをしていようと思いまし

た。

でも、おじいさんは何回も立ち上
ろうとしては、しっばいしてしまいま
す。そのようすを見ていたら、思わず
声が出てしまいました。

「だいじょうぶですか。何かこまっ
ていることがありますか。」

とわたしが言うと、おじいさんは、
「ありがとう。うれしいよ。」

と、ちよつとかれた声で答えてくれま
した。

わたしは、声をかけてよかったなと
思いました。

「こしがいたくてこまっでいるんだよ。」
と、おじいさんは言っていました。

わたしは、おじいさんの手をもって、
せなかをささえました。おじいさんは、

立ち上がる事ができました。

「どうもありがとう。手をかしてもらえてたすかったよ。」

と言つて、おじいさんは帰って行きました。

わたしは、五月一日のふれ合いしゅう会のことを思い出しました。その時、車いすにのっているA先生が、お話をしてくださいました。A先生は、かいだんをのぼったり、高いところのものをとったりする時にこまるそうです。でも、そんなときに、近くにいる人がちよつと手をかしてくれれば、みんなと同じことができると言っていました。おじいさんも、わたしがちよつと手をかしたら、立ち上がる事ができました。おじいさんは、とてもうれしそ

うにわらっていました。わたしも、おじいさんのえ顔を見て、とてもうれしかったです。

これからも、人の気もちを考えて、ゆう気を出して声をかけようと思いません。

やさしいことばのまほう

小 二

わたしは、ようち園のころ、少し弱虫でなき虫でした。よくころんでは、たくさんけがをしていました。いたくてかなしくて、しくしく泣いていると、いつも友だちがそばに来て「だいじょうぶ。なかないで。」と言ってくれました。足からちが出ていて、すごくいたいはずなのに、友だちが心ばいしてやさしいことばをかけてくれると、ふしぎなことに、あまりいたくなくなってくるのです。そして、うれしい気もちがいっぱいになって、つらい気もちやかなしい気もちがきえ

ていきました。やさしいことばが、けがのいたみや心のいたみをけしてくれたのかな。やさしいことばは、まほうみたいだなと思いました。

やさしいことばのまほうは、ほかにもありました。わたしは、一年生のとき友だちから

「いっしょにあそぼう。」

と声をかけられたことがあります。入学したばかりで、まだ学校にもなれていませんでした。だから、とてもうれしかつたし、元気がわいてきました。それから「ありがとう」も、やさしいまほうのことばです。家でお手つだいをするとき、お母さんが「ありがとう。」と言ってくれます。わたしは、とても

うれしくなったので、もっと手つだつて、お母さんによるこんでもらいたいと思います。

ながっていったらいいなと思います。

友だちにやさしくできた時にも、「ありがとうございます。」

と言われます。何だかいい気持ちになります。

わたしは、やさしいまほうのことばをたくさんもらって、うれしい気持ちになったり、元気になったりしています。だから、わたしもやさしいまほうのことばがたくさん言えるようになりたいです。そして、まわりの人をうれしい気持ちにしたいです。

やさしいことばを言われた人が、また、つぎにだれかにやさしいことばをかけていく、そんなふうにどんどんつ

なかよくできたよ

小 三

わたしは、発表したり音読したりする時に、言葉の一字目を何回もくり返してしまいます。

二年生の時のことです。

ある日、わたしが学校に来たとき、なかよしの友だちに

「どうして、言葉の一字目をくり返すの。」

と聞かれました。わたしは、どうやって答えているのかわかりませんでした。だから、

「どうしてって言われても、わたしにもわからないの。」

と答えました。

しばらくたって、ほかの人からも

「何で言葉をくり返すの。」

とまた聞かれました。だからわたしは、こう答えました。

「わたしにも、わからないの。」

その時、少し悲しくなりました。

じゅぎょう中、音読をしているとき、また言葉をくり返してしまいました。すると、クラスの人がわらいました。

でも、わたしは読みつづけました。読み終わったときには、なきたくなりませんでした。

わたしは、このしょうじょうが出ることをよく知っているA小学校の先生に聞いてみました。

「どうして、わたしは言葉の一字目を

くり返しちやうんですか。」

すると先生は、

「それはね、だれにもわからないんだよ。」

と教えてくださいました。

それで、わたしはこの前聞かれたなかよしの友だちに

「わたしが言葉の一字目をくり返してしまふ理由は、だれにもわからないんだって。」

と言いました。すると友だちは、

「うん、わかった。そうなんだね。」
と言いました。

それから、友だちともつとなかよしになりました。クラスの友だちもわらわなくなりまして。わたしは本当の理由が分かって、今までわけがわから

なくてもやもやしていたのが、さっぱりした気もちになりました。

これからも自しんをもつて、みんなの前で発表したり音読したりしていきたいと思えます。

わたしはみんなに
やさしくできたかな

小 三

わたしが二年生の時、図書館にクラス全員で行くと、一つのつくえに四人しかすわれませんでした。みんなが、どこにすわるかまよっていました。みんながすわる場所が決まっても、五人くらいまよっていました。いっしょのつくえにいた子がその五人に気づきました。少したつてから、その子が他の子に相談して、こまっっている子たちに言いました。

「あまっっているいすを持ってくれば、ここにすわれるよ。」

こまっっていた子たちがいすをもつてきたとき、わたしが

「せまいけど、いいかな。」

と言いました。その子たちはうれしうに

「いいよ。」

と言ってくれました。わたしたちのつくえは九人くらいになったので、先生が

「そこのつくえ、九人もいるけどせまくない。」

と聞かれました。わたしたちは、

「だいじょうぶです。」

と答えました。わたしたちは、自分の荷物はみんなかさねておいておきました。はばは、ぎりぎりだったけれど、みんなでゆずり合えばだいじょうぶだ

と思いましたが。みんなえ顔でした。わたしもうれしくなり、よかったと思いました。先生もえ顔でした。

少したって先生が、プリントがまだ終わっていない人を聞きました。わたしたちのつくえの子は、みんな終わっていません。せまかったけれど、みんながんばってやれたからだと思います。何だか気持ちがよくまりました。これからも、どんな子でもこまっていたら助けたいと思います。みんながそうしたら、わたしたちの小学校は、明るくて元気な学校になると思います。

ペルテス病になつて

わかつたこと

小 四

ぼくがこのテーマにしたわけは、ペルテス病という病気になつて、ねたきりや車イス、松葉づえのけい験をして、体の不自由な人の不便さや、大変だということが実感できたからです。

まず、ちゆう車場のしよう害者のためのスペースに、健康な人がとめていたために、はなれた所にしか置けなかったことです。その時のぼくは車いすでい動していたので、車と車の間がせまくて、乗りおりがすごく大変でした。い動のときも走っている車にぶつかり

そうになつたり、車のわきから人が出てきたときにぶつかりそうになつたりしました。今までは、少しだけ遠くなるだけかと思つていたのに、自分のその立場になつてみたら、きけんがたくさんひそんでいることがわかりました。

次に、松葉づえで歩いてるとき、階だんで後ろから来た人がぶつかり、階だんから落ちそうになり、こわい思いをしたことです。階だんだけでなく、ろう下も走つてはいけないという決まりがあるのに、走っている人をよく見ます。今までは走っている人がぶつかつてきても、少しいたいくらいだったけれど、今はとてもこわいです。このようなことをけい験してわかつたことは、自分が思つていた以上に、体の不

自由な人は、大変でこわい思いをして
いることです。そして、想ぞうだけで
はわからないことがたくさんあるとい
うことです。

去年の秋、家族といっしょに車いす
で祭りに行きました。人が多かつたせ
いもあり、地面がでこぼこしているこ
とに気付かず、車いすですまずいてし
まうなどこわい思いをしました。家で
は、バリアフリーが当たり前だけど、
町へ出てみると、きけんがたくさんあ
ります。あと、困ったことは、トイレ
でした。しょう害者用トイレは、どこ
にもあるわけではないので、外出す
るときに、トイレがあるか心配でした。
ぼくは、しょう害のある人がどうし
たら安心してくらせるかを考えてみま

した。

一、バリアフリーや、しょう害者用ト

イレを社会に広げる。

二、決められたルールをぜったいに守

るようにする。

三、こまっっている人がいたら、助ける。

ぼくの足が治ったら、ルールを守り、

相手の立場になって行動できるやさし

い人間になりたいです。

町で見かけた思いやり

小 四

わたしには、月日がたってもわすれられないことがあります。お母さんと妹と車に乗っていたときの話です。信号が赤になり、横だん歩道の手前で止まりました。青になった横だん歩道を、車いすに乗った人がわたり始めたのが見えました。まだわたり終わっていないのに、信号が変わりそうになったので、車いすの人、だいじょうぶかなと、心配になりました。

その時、近くを通った男の人が、横だん歩道をゆっくりわたり始めていた車いすをおして、手助けを始めたのです。

男の人は、ちよつと待ってくださいというふうに、手で右にも左にも合図を出したので、車いすに乗った人は、無事に横だん歩道をわたることができました。わたしはほつとしました。もし私が男の人と同じように歩いていたら、すぐに車いすをおして助けることができただろうか、と考えるみました。とても思いやりのあるあの男の人の行動は、心にやきついていきます。

同じように、わたしの家族にも思いやりを感じたことがあります。お母さんの去年のたん生日、家族でレストランに食事に行きました。土曜日だったので、レストランはとてもこんでいて、外で待つことになりました。すると、こしの曲がったおばあさん

が手おし車をおしながら近づいてきて、

「わたし、どこにいるのかしら。」

と言ったのです。近くにいた人たちは、そのおばあさんをじろじろ見ています。わたしは大人がまい子になるなんてと、おどろきました。それと同時に、おばあさんは家に帰ることができないのかも知れないと、不安な気持ちになりました。お母さんがそのおばあさんに「おうちの住所はわかりますか。」とたずねました。おばあさんは、町の名前も番地もはっきり答えました。お母さんは

「お店の人によべれたら、先に入って食べていてね。ちよつと心配だから、少しいっしょに行ってくるね。」
と言って、おばあさんといっしょに歩

いて行ってしまいました。

しばらくして店の人によべれ、お父さんと妹と席に着きました。メニューを見て、何を注文するか決めましたが、お母さんはまだもどつてきません。三人でどこまで行っちゃったんだろうねと、心配していました。お母さんの誕生日なのに、先に食べるのは悪いよな気がするなと思っていたら、お母さんが少しハアハアしながら、やっともどつて来ました。そして料理を注文してから、あのおばあさんの話をしてくれました。

少し歩いて行った所に、地図の看板があったので、おばあさんの言った場所から、家は大きなスーパーの近くにあることがわかったそうです。スー

パーまで送ってあげよう。そうすれば帰れるかも知れないと考えて、さらに歩き始めたお母さんに、おばあさんは「ずいぶん歩いて来たけど、お姉さんもどれるかい。」

と、何度も聞いてきたそうです。もどれるかどうかかわからないのは、おばあさんなのに。

心やさしいおばあさんは、出身は福島県だけど、今はそこに身内もいなくて、さい玉に一人でくらししていることなど、歩きながらいろいろ話してくれましたそうです。

やつとスーパーに着いた時、おばあさんは、「ずいぶん大きなスーパーですねえ。」と、初めて見たように言ったので、お

母さんはあきらめてけいさつに電話をしたそうです。来てくれたおまわりさんは、

「このおばあさん、前にも家に送っていただきますのでご安心ください。ありがとうございます。帰ろうか。」

と言って、連れて行ってくれたそうです。

お母さんは、おばあさんが事ここでもあったらと考えると心配でじつとしていられなかった、と言っていました。お母さんがとった行動は、とても勇気があっておどろきました。わたしも助けたいと思ったけれど、どうしたらいいかわかりませんでした。家に帰れなくなつたおばあさんをそのままにせず、

ずっと付きそってあげたり、けいさつに連らくして最後まで見届けてあげたりしたお母さんがかつこいいな、と思いました。今でも時々家族で、

「あのおばあさん、元気にしているといいね。」

と話しています。

町でこまっている人は他にもたくさんいるかもしれせん。目や足が自由な人、お年よりなどに、そつと手をかすことのできる人になりたいです。あの男の人やお母さんのような勇気があれば、わたしにも何か手伝うことができるはずです。そして、みんなが思いやりの心を持って見守ることができれば、もつとやさしい町になると思います。きれいなしせつや生活に便利な

店も大切ですが、わたしは、わたしたちの町が思いやりにあふれた町になるように、自分で考えて行動していきたいです。

大好き、大きらい、でも大好き

小 四

私には仲の良い友達がいいます。その子は明るくて積極的に友達思いのやさしい子です。私が転んでしまったときにも、すぐにとんで来てくれて、「だいじょうぶ、けがしてない。」と、心配して聞いてくれる子です。だから、その友達は、みんなの人気者です。人気者だからいつもたくさんの友達がまわりにいます。私もみんなといっしょに、わいわい楽しく遊んでいることがあります。その仲の良い友達と、二人だけで遊ぶこともありました。

ある日のことです。いつものように私と友達が話していると、他の子が来て私をおしのけて間に入ってきました。その子は私の仲の良い友達と、二人だけになりました。かと思った。その時は、人気者なんだから仕方がないかなと、自分の心に言い聞かせていました。でも、だんだんとその仲の良い友達と他の子が仲良くなっていく様子が伝わってきました。私は一人になってしまったように思えて、とてもさびしい気持ちになりました。家に帰ってもそのことが忘れられず、夜、ふとんの中で赤ちゃんのように声を上げて泣きました。つらくてさびしくて、悲しい気持ちでいっぱいでした。ひとりぼっちになったような気がしたのです。

しばらく考えていましたが、いつまでも暗い気持ちでなやんでいる自分がきらいになりました。

次の日、こわかったけれど勇気を出して友達に聞きました。

「ねえ、私のこときらい。」

と言うと、友達はその言葉を打ち消して、

「何言ってるの、大好きだよ。」

と言ってくれました。私は、おどろきとうれしきで、ゆがんだ笑顔になっただけかもしれない。

次の日、学校に行くと友達が

「ねえ、いっしょに遊ぼう。」

と、声をかけてくれました。うれしかったのですが、私は小さい声で言いました。

「三人なんですよ。」

「ううん、断ったから二人だけで遊ぼう。」

と言ってくれました。

「えっ、私のためだけに。」

と思い、びっくりしました。そして、とてもうれしくなりました。今度は心からの笑顔になりました。久しぶりに二人で遊べたことがとてもうれしくて楽しかったです。それから毎日のように休み時間になるとすぐ、おしゃべりをしたり、遊んだりしました。仲の良い友達はいつも笑っていて、やさしくておもしろくて、私は前よりもずっと好きになりました。前よりもずっとずつときずくが深まったように思えました。

「ねえねえ、ずっと親友でいようね。」
と、思い切って聞いてみました。すると

「そんなの当たり前だから、ずっと親友ね。」

と答えてくれました。私はとび上がるほどうれしくなりました。

このできごとがあつてから、私の心の中は、いつもふわふわ心になっています。ろうかや校庭、水飲み場でその友達を見かけるだけで元気になれます。私はこれからも友達を大切にしていきたいと思います。仲の良い友達が遠くにいるように思えて、こどく感に落ち入って泣いた日が、何だかばかしく思えました。

それから、二人だけがいいな、自分

だけの友達でいてほしいな、と思ったことについても考え直しました。

あの時、二人の間に入ってきたあの友達だって、二人だけで遊びたかったにちがいありません。なぜその時に、三人で遊ぶと楽しいよねという声かけがでしなかつたのでしょうか。私だけの友達になってほしいというのは、自分勝手だということにも気付きました。ふわふわ心にしてくれた、大好きな親友にも「ありがとう」と言いたいです。二人だけの遊びの時間も作ってくれたし、大好きだよと言ってくれたことにも、勇気づけられました。どくせんすることだけが友じようではないと思えました。

友達のこと大好き、一人でなやんで

いた自分のことは大きらい。でもいろ
いろなことがわかって、友達の全ての
ことが大好きというところがわかりまし
た。

耳の聞こえない いとこ

小 四

わたしのいとは、生まれつき耳が聞こえなかったそうです。そのため、言葉を上手に話すことができません。今は、中学校一年生の男の子です。

わたしがようち園に通っていたころ、いとこの耳が聞こえないことを知らなかったのです、お母さんに、

「耳につけている物は何。」

「どうしてしゃべらないの。」

と聞きました。その時に、初めて耳のことを聞いて、とてもおどろきました。

それから少し大きくなって、字が書けるようになったとき、紙に話したい

ことを書いて会話をしました。会話ができた時は、とてもうれしかったのを覚えています。

そのほかに、ようち園の時に習った手話ソングを、いとこみんなで練習して見せました。いとこが笑ったときは、ちゃんと手話ができているんだなあと思ひ、うれしい気持ちになりました。

最近、いとこのお母さんに、簡単な手話を教えてもらいました。例えば、

「いっしょに遊ぼう」「ご飯おいしい」

などです。いとこのお母さんのおかげで、手話を少し覚えることができました。

他にも、アナと雪の女王の「雪だるま作ろう」などを教えてもらいました。

私は、手話でアナと雪の女王の歌ができたらいいなあと思っていたので、

教えてもらえてとってもよかったです。

今度いところのお母さんに会ったら、
かん単な手話を教えてもらって、いと
こと手話で話せるようになりたいです。
そして、手話がちゃんとできるようにな
ったら、クラスのみんなにもたくさ
ん教えたいです。

おじいちゃんにもらったもの

小 四

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが生まれたとき、ものすごく喜んでくれました。泣いて喜んでいたそうです。ぼくの生まれた病院に毎日通ってくれました。

おじいちゃんは、ぼくが生まれてすぐ、がんが見つかりました。生きていられるのは、あと二年と言われたそうです。おじいちゃんは、ぼくが小学生になってランドセルをせおうすがたを見たいと言っていました。でも、のこり二年の命では見る事ができません。おじいちゃんは、大きな病院にう

つってがんとたたかうことにしました。たくさんの薬を飲んだり、点てきをうけたり、手じゅつをしてがんをとったりました。

たくさんのつらいちりょうをして、おじいちゃんは、ぼくのランドセルすがたをみる事ができました。二才年下の弟のランドセルすがたも見る事ができました。でも、おじいちゃんは、弟の入学式直後にたおれてしまいました。

おじいちゃんは、弱った体を引きずって、ぼくの野球の試合やじゅう道の試合を見に来てくれました。立っているとふらふらしてしまうので、すわっておうえんしてくれました。

ある日、おじいちゃんが言いました。「もう見に来られないかもしれない。」

ぼくは、おじいちゃんがなぜそんなことを言うのかわかりませんでした。それから、おじいちゃんはすぐに入院しました。お母さんは、おじいちゃんの病院に通うようになり、家にない時もふえてきました。お母さんは、ぼくと弟に言いました。

「おじいちゃんは、もう長く生きることは、できないんだよ。」

家族でお見まいに行きました。おじいちゃんは、ぼくたちに会えてとても喜んでくれるようでした。おじいちゃんには、ものすごくやせてしまいました。病院に行くと、おじいちゃんはぼくたちにアイスを買ってくれました。帰るときは、いつまでもぼくたちを見送ってくれました。

でも、いつも元気だったおじいちゃんの声は、だんだん小さくなっていききました。おじいちゃんは、小さな声で「野球がんばれ。」とぼくに言いました。

入院して一カ月後、おじいちゃんは、意識がなくなりました。お母さんは病院にとまるようになりました。

「家族でがんばろう。」

と、お母さんは言いました。ぼくは、お兄ちゃんなのでがんばろうと思いました。

おじいちゃんは死んでしまいました。ぼくは、悲しくて悲しくて泣いてしまいました。やさしくていつもぼくたちをかわいがってくれたおじいちゃん。たくさん公園にも連れて行ってくれた

り遊んでくれたりしました。おじいちゃんにとってぼくは元気になるそんざいだったかもしれないが、ぼくにとつても大切なおじいちゃんでした。

おじいちゃんは、最後まで生きることをのぞみました。ぼくが二十才になるまで生きると、がんばっていました。でも、ぼくが九才になるまでしか生きることができませんでした。おじいちゃん病気でたたかっていたが、ぼくが見て、ぼくもどんな時でもがんばろうと思いました。おじいちゃんが死んでしまった悲しいけれど、おじいちゃんから教わったことは、たくさんあります。そして、おじいちゃんからたくさんの愛じょうとやさしさをもらいました。

おじいちゃんの最後の声は、ぼくには聞こえませんでした。でも、小さな声で何か言っていました。おじいちゃん、

「もうちよっと生きてかった。」

「空の上で見守っているよ。」

「大人になるまでがんばれ。」

と言っていたような気がします。その時は何も言えなかったけれど、今だったらこう言えます。

「ぼくがおじいちゃんからもらった愛じょうとやさしきは、おじいちゃんには返せないけれど、ぼくもたくさんのおじいちゃんから教わったことを、家族や友だちなどまわりのみんなに分けてあげたい。」

支えてくれる友だち

小 五

ぼくは、お母さんのおなかの中で病気になる、左右のうが半分ずつ機能しなくなってしまうました。そのため、生まれたときから、ぼくの左手足にはまひがあります。

ぼくは、その手足が使いにくいです。体育の時間は、上手に体を動かせないことが多いので、みんなに笑われないか少し心配になります。給食の時間は、上手におぼんを持ってなくて落としてしまい、友達の洋服をよごしてしまったこともありました。さらに、荷物の多い日は、学校に行くのも大変です。

ぼくと初めて関わる友達や、関係がうすい友達の中には、迷惑をかけてしまうのと、いやな顔をする人もいました。また、運動会のクラス対こう種目では、練習の時にぼくが失敗しないか心配する友達もいました。そういう時は、落ち込んでさびしくなりました。

ある時、先生がみんなにぼくの体のことを話してくれました。その時から、みんながぼくの体を理解してくれるようになってきました。

以前は、ぼくのすることに文句を言う人が多かったのですが、今では、ぼくがこまっっていると、「だいじょうぶ。手伝おうか。」と言って、はげましてくれる友達も増えました。

最近うれしかったことは、四年生の三学期に行われた、クラス対こう大なわ大会のできごとです。はじめ、ぼくは友達と同じようにとぶことは、絶対に無理だとあきらめていました。でもそんなぼくを、みんなが、

「がんばれ。」

と一生けん命はげまし、練習のときから協力してくれました。ぼくも、次第に友達の思いに応えたいと思うようになり、学校だけでなく、通級でも家に帰ってから練習するようになりました。

しばらくすると、次第に練習の成果が表れ、みんなのようにとべるようになりしました。その話を病院の先生にしたら、先生もおどろいていました。ふ

り返ってみると、みんなの応えんや協力がぼくをやる気にさせてくれました。大なわ大会の練習を通して、ぼくは、友達の大切さや、友達をはげます大切さを学びました。

今、ぼくは五年生になりました。まだ、友達と同じようにできないことや少しおくれてしまうことがあるけれど、ぼくの周りには、はげましてくれるやさしい友達がたくさんいます。

そして、その友達とともに学んだり、遊んだりしていると、楽しいことやうれしいことがたくさんあります。だから、ぼくもできることは進んでやり、こまっている友達がいたら手をさしおべて、はげますことができるやさしい人になりたいです。また、何事にもす

ぐにあきらめない強い心を持てるよう
にもなりたいです。

今、ぼくには支えてくれる友達が
いて、そのことに感謝しています。そんな
友達を絶対に大切にしないではいけ
ないと思います。

おばあちゃんに会って

小 五

目にしよう害のあるおばあちゃんを知っています。母の仕事先で出会いました。

八十才くらいのおばあちゃんはいつも当たり前のように眼鏡をかけています。それなのに

「眼鏡も意味がない。」

と、言ったのでびっくりしました。おばあちゃんは、眼鏡をかけているときでもかいごの人の力がないと歩けないそうです。けれど、しせつのお祭りでは、「いっしょにまわろう。」とわたしに声をかけてくれました。車いすに乗ることも多いのですが、ゆっ

くりと立ち上がって、つえをついて歩くこともできます。歩くときはかいごの人がそばにいてくれました。わたしは、おばあちゃんが歩くとき、うでをやさしく持っていっしょに並んで歩きました。階段では、

「階段ですよ。」

と言いました。それは、四年生の際の総合の学習を思い出しながら、かいごの方を見てまねしました。いっしょにいる間、ずっとおしゃべりをしていました。わたしは、四年生のころの学校の様子や家で弟がいたずらしてこまることを話しました。おばあちゃんは、わたしの話をずっと楽しそうに笑いながら聞いてくれました。おばあちゃん

は、家でくらししているころ食べたおい

しいたいやきの話をしてくれました。
楽しかったです。

五年生になってすぐ、私は左目がは
れて眼帯をしました。すると、左目が
全く見えなくなりました。慣れてい
るはずの学校の階段なのに、ふみ外して
落ちてしまいました。音楽室では、ふ
めん台のスタンドが見えずに足をひっ
かけてしまいました。いつも、友だち
が身体を支えてくれたり、手をつかん
でくれたりしたので、がをしなくてす
みました。荷物を持つと体がふらふら
してしまいました。歩くのがすごくこ
わかったです。できるだけゆっくり、
ゆかをするようにして歩きました。
手すりがあれば持ちました。眼帯をし
ていたのは、わずか二、三日だけのこ

とだったのに、私にとってはとても長
く、不安に感じました。

そんな時、おばあちゃんの言葉を思
い出しました。

「目が悪くて自由に歩けなくなっただけ
れど、みんなと同じ人間。声を聞い
ていると面白いこともわかるし、笑
うこともできるよ。だから、楽しい
ことはいっぱいある。」

「もし、目が見えなくなることがあった
ら、かいごしてくる人にきちんと
お礼が言える人になってほしいな。」
おばあちゃんは、「見える」「見えな
い」は目のことではなくて、耳や心で
受け止めることや、「ありがとう」の大
切さを教えてくれたのだと思います。

ぼくの宝物

小 六

ぼくは、重い心臓の病気で生まれたので、すぐに大きな病院に入院した。心臓の大動脈と肺動脈が逆についているだけでなく、心室に大きな穴が開いていたのだ。この病気は、酸素不足でくちびるやつめの色がむらさき色になり、呼吸が速くとても苦しいので、手術が必要だった。

生後二か月の時、最悪な状態になり、生きるか死ぬかの大手術をして、やっとなぼくの命が助かった。さらに、気道が狭いこともわかり、のどに穴を開ける手術もした。命が助かった代わりに、

両足が動かなくなった。原因はわからなかった。母は、ぼくの命が助かった喜びと、ぼくが笑うことだけで、足のことなんて何とも思わなかったそうだ。手術が成功したので、少しずつ良くなり、ぼくの体は成長していった。二才と四才の時も手術をして、自分で動けるくらいに元気になることができた。この頃のぼくは、手を使って、座ったまま自分の体を移動させていたため、すぐにつかれてしまい、家の中だけで遊ぶことしかできなかった。

そんな時、車いすというプレゼントをもらった。車いすに乗ってタイヤを手で回すと、前に進むのがうれしかったのを覚えている。車いすに乗れば、自分で好きな場所に自分の力だけで行

けることがうれしかったのだ。

ぼくは、自分の足で立てないので、歩くというのがどんな感じかわからない。でも、車いすがぼくの足になってくれたので、自分で自由にどこにでも行ける楽しさがわかった。だから、車いすはぼくにとって「一番の宝物」だ。

車いすに乗っていると、「大変だね。かわいそう。」

と言われることがあるけれど、ぼく自身は、全くそう思ったことがない。車いすに乗っていても、ふつうの人と変わらないと思っている。

車いすに乗っているぼくは、元気そうに見えるけれど、心臓病が治ったわけではなく、病状が良くなっただけで、今でも心臓病と戦っている。例えば、

暑いと人一倍体温が上がり、寒いと血液のめぐりが悪くつかれやすくなり、熱が出てしまうのだ。だから、冬の体育は、長そで長ズボンでやらせて欲しい。夏は、涼しいところで休ませて欲しい。

ある冬の寒い日、体育の時間に

「なんでみんなは半そで短パンなのに、あったかいジャージを着ているの。」

と言われたときは、ショックだった。「ぼくは、心臓病と戦っているんだ。理解してくれ。」と思うと同時に、「みんなと体育をやりたい。車いすでもいっしょにやらせて。がんばるから。」と心の中でさげんでいた。

林間学校では、リフトに乗って山の頂上にも行けた。砂利道でも動ける車

いすのタイヤをつけて、みんなが弁当
物を食べているところにも行けた。運動
会の組体操では、みんなといっしょに
肩を組んで、みんなの輪に入ることが
できた。百メートル走もみんなといっ
しょに走ることができた。

今まで車いすでは、みんなといっし
よにできないとあきらめていたことが
できた。車いすに乗ってできたのだ。
みんなが車いすのぼくを助けてくれ
からできたんだ。

「みんな、ありがとう。」

両親も、祖父母も、ぼくの姿を見て
喜んでくれた。がんばって良かった。
あきらめなくて良かった。車いすがぼ
くの足になって、願いをかなえてくれ
たのだ。だから、車いすは「ぼくの宝

ダウン症のAちゃん

小 六

私の弟の友達には、障害のある子がいます。障害には、さまざまな特ちょうがあります。弟の友達Aちゃんは、ダウン症という障害があります。あなたの身近に障害のある人はいませんか。私は、初めはAちゃんに障害があることはわかりませんでした。ただ、幼稚園なのに、もっと小さい子に見えていました。

あるとき、弟の別の友達のお兄ちゃんから変なうわさを聞きました。

「Aちゃんって病気なのかな。」

うわさを聞いた日、帰ってからお母さ

んに聞いてみると、

「Aちゃんは病気じゃなくて障害だよ。ダウン症っていう障害なの。」

そう聞くと、私は障害についての見方が変わりました。障害という言葉は知っていても、身近にだれもいないと思っていたので、まさかこんな身近にいるなんて、おどろきました。そして、それからAちゃんに対してどう接したらいいのか、わからなくなりました。

夏になると、毎年、弟の友達家族と合宿をしています。もちろんAちゃんもいっしょです。一回目に泊まった所では、最初に大人だけが集まって説明を聞きました。そのときは、子供は聞いてはいけませんでした。そこで、Aちゃんも、お母さんから待っていてと

言われていました。しかし、Aちゃんはお母さんからはなれようとしませんでした。そのときです。私は頭では考えていなかったのに、

「Aちゃん、いっしょに遊んで待って
いよう。」

と声をかけていました。すると、Aちゃんは、うれしそうに私に向かって走ってきました。きつとAちゃんはだれかに声をかけられるのを待っていたのだなと思いました。それから、お母さんたちを待っている間に、Aちゃんとても仲良くなれました。いっしょに水遊びをしました。いっしょにかけっこもしました。いっしょに写真もとりました。ダウン症という障害があっても、みんな同じ人間で、同じように生活で

きるのだなと思いました。

しかし、私が一番なやんだのは、接し方ではなく言葉でした。ダウン症の子の多くは言葉が聞き取りにくかったり、しゃべれなかったりするそうで、Aちゃんの言葉も聞き取りにくかったです。パーベキューなどをしたときにも、

「いるの。」

と聞くと、

「い：：：。」

のように最初が聞こえても、後がわからないので、Aちゃんに

「動きでやって。」

と言いました。すると、わからなかった言葉もわかるようになりまし。私は何とか聞き取れるように、努力した

いと思いました。

私は、ダウン症という障害を知って、障害のある人が、身近にいるかもしれないと考えていた方が、よいのではないかと思いました。何も考えずに障害のある人と接するのは、とても難しいと感じたからです。みんな同じ人間です。障害のある人達も困っているのかもしれません。みなさんも一度、障害について考えてみてください。

その一言に込めた気持ち

小六

「この人、目が不自由なのかな。」
一年前のことだ。一年生の時から習っているそろばんの帰り、母がむかえに来ていなかったので、自転車置き場で車を待っていた。

このそろばん教室の前は、私の通学路でもあった。歩道はせまく、車やバイクはよく通るので、危ないから気をつけてねと、よく母に言われていた。なかなかむかえに来なくて、少し心配になった。今日は少し早く終わったからだ。
少しすると、うすいむらさき色のサ

ングラスをかけたおじさんが、つえを地面にすり付けるようにして歩いて来た。私は、この人は目が不自由なのかなと思ったが、そんなに戸惑うことはなかった。

昨年、高い者疑似体験や、手話教室で「目の不自由な人について」ということを教わっていたためだ。そこではサングラスをしていることは教えてもらわなかったが、おじさんがつえについていたので、目が不自由なのだと思った。

私はその人のななめ前くらいで、「こんにちは。」
と、あいさつをした。するとおじさんは、私の方は向かずに、でも笑顔で会しゃくして、

「元気だね。」

と言いつつ、またつえを器用に動かしながら歩いていった。A町にも目の不自由な人はいるんだ。でもここは危ないな。ちよつとした興味と心配な気持ちもあった。

母が迎えに来た。高れい者疑似体験や手話教室を通して、実際に会って話をしてみたいと好奇心で話しかけたが、そんな気持ちで話しかけていいのかなと思つたので、母には話せなかった。気が付けばそんなことは忘れていた。今年、福しの標語が入選したので、A町の福し大会に行ったとき私は大切なことに気付いた。それは、高校生による福しのためのエコキャップ集めなどのボランティア活動を行う部活動紹介

介を聞いていたときのことだ。

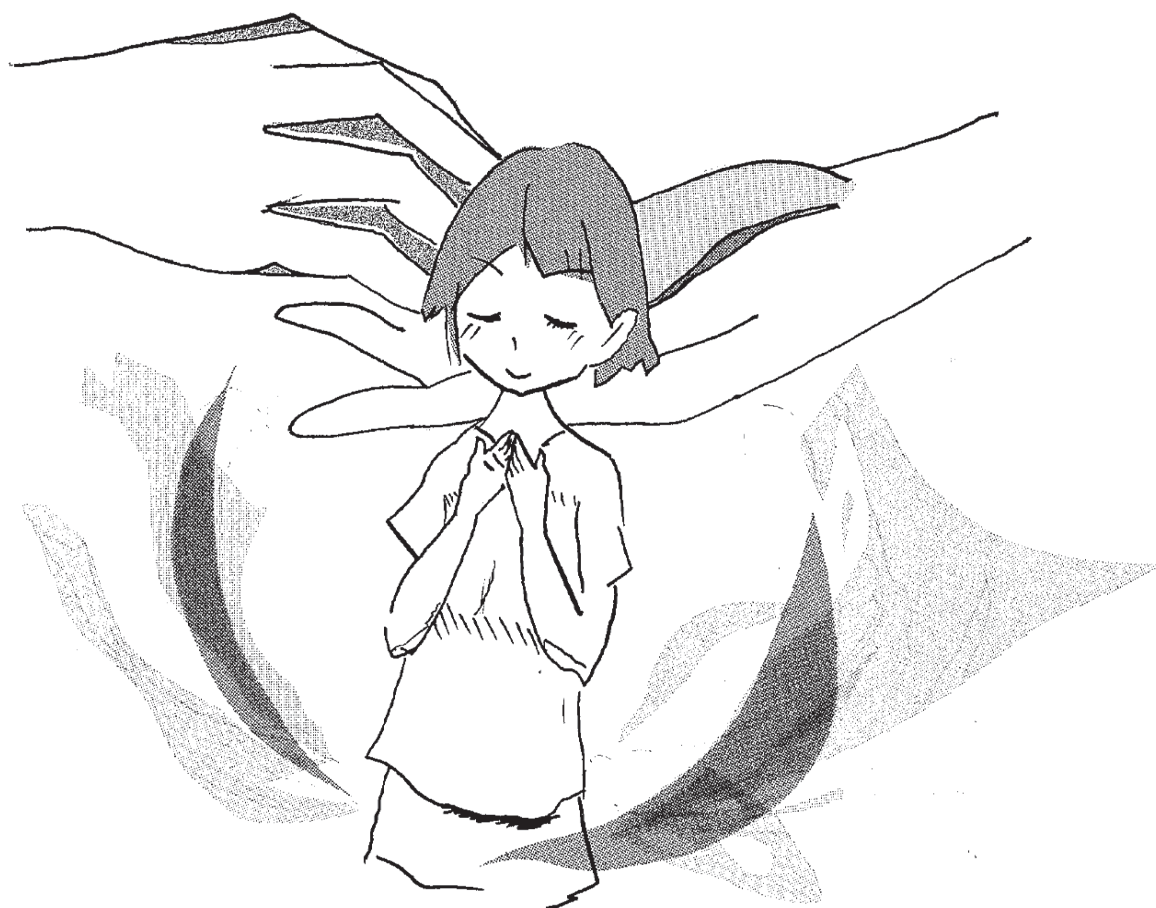
二人の高校生は、それぞれの家族に病気で亡くなったり、障害がある人がいたりした。そこで、人の役に立ちたいと願ひ、この部活に入部したそうだった。私は、一年前のことを思い出した。「そんな強い思いで人に接しているんだ。」と、少し自分が情けなくなった。

福し大会の帰り、高れい者疑似体験や手話教室で、何を学んだか考えてみた。高れい者疑似体験の先生が、「高れい者や障害者の人は、思いやる気持ちを持って優しく声をかけてもらえるだけでうれしい、とよく言っています。」と言つていたのを思い出した。私ははつとした。あの日の自分は、「この人、目

が不自由なの。」という興味本位で話しかけた。でも、逆の立場で考えると、どんなに良い言葉でも、軽い気持ちで言われるのはうれしくない。

この社会では、障害があるというだけであんな見を持たれることがある。けれど、それはちがう。みんな同じ人間であり、平等でなくてはならない。いつも、相手をいたわる気持ちを心の中にしまっておけば、自然と言葉に気持ちにはこもる。その一言にこもった気持ちは温かい。当たり前、でもとても大切なことを、この経験から学ぶことができた。

中学校・高等学校
特別支援学校の部



障害者差別

中 一

私は保育園に通っていた頃、足が不自由でうまく歩けない女性と鬼ごっこをして遊んだことがありました。その女性とは、みんなが仲良く話したり、遊んだりと、何の偏見もなく楽しく過ごすことができました。しかし、少し大きくなり、小学校に上がってからは、障害のある人に対して心の中でひどいことを思ったことがあります。

小学生の時、私のクラスには障害のある子がいました。その子に対して周りの男子が

「こつちに来るなよ。」
などの言葉を笑いながら言っている場面を目にしました。その時、私は男子と一緒にあって笑って見ているだけでした。

町や駅で手足が不自由な人がいたときも、私は一歩引いた目で見て、こそこそと友達と話していました。

中学校に入学し、人権学習がありました。いろ

いろな差別について考えたとき、私にも思い当たることがあり、私は知らないうちに「障害者差別」をしていたのだと気づきました。そこで、これからは差別をしないように、心がけなければならぬ大切なことを考えてみました。

一つ目は、自分自身が「差別の心をもたないこと」です。差別の心をもってしまったら、私の行動や判断が差別を生んでしまいます。そこで、障害のある人に出会った時に、何か困っている様子ならば、進んで声をかけたり、手伝ったりと、積極的になろうと思いました。

二つ目は、「周りの人に流されないこと」です。小学生の時のように、周りの言動に流されてしまうのではなく、正しい判断ができるようにしようと思いました。そして、一人でも多くの人が差別をしなくなるようにまずは私自身が変わって、「障害者差別」をなくしたいです。

三つ目は、「障害のある人達のためボランティア活動に積極的に参加すること」です。ボランティア活動に参加することは、今の私にはとても勇気がいることです。しかし参加して身の回りのお世

話や、できないことの手伝いをしたいと思いましたが。そして、人権学習で学んだように、積極的にコミュニケーションをとりたいと思いました。自分の好きなことについて話を聞いていただいたり、また、話をしていただいたりと、楽しく会話をし、打ち解けることができたら、私自身にとっても、とても意義のある時間になると思います。

人権学習を通して、私はたくさんのことを学び、考えさせられました。そしてだれにでも平等に生きる権利があることを強く感じました。障害があることにより、不自由に思う人がいるならば、平等にできる社会にすることが大切だと改めて思いました。社会を見ると、多くのことが改善されているように思います。視覚障害者誘導用ブロックや、障害者用トイレ、音響信号機など、障害のある人たちが安心して生活できるよう社会環境が整えられています。それでもまだまだ、不十分なところはあると思います。本当の意味で障害のある人たちが、普通に生活が送れる社会を作らなければならぬと思いました。

そして、私が小さかった頃のように、誰とでも

仲良く話したり、遊んだりと、心のバリアを取り除くことが何よりも大切だと思いました。

私は人権学習を通して、今までの自分の考え方や感じ方を変えていこうと思いました。日本だけでなく、この世界から「障害者差別」がなくなればいいと思います。人権について学習して、もつとこのことについて考えながら生活していこうと思えました。改めて「人権」はとても大切なことだと感じています。

高齢者にやさしい社会

中 一

一 昨年の夏、曾祖母が足を骨折して病院に入院しました。曾祖母は、骨粗しょう症という、骨が弱くなる病気になってしまいました。少し転んだだけで骨が折れてしまったり、ひびが入ってしまったりする、とてもこわい病気です。長い入院生活のため認知症も進んでしまい、一人でトイレに行くことも困難になり、施設に入ることになりました。

もともとは、誰とでもすぐに仲良くなってとてもおしゃべりだったけれど、認知症になってからは、家族以外とはあまり話をしなくなってしまうました。施設に遊びに行くと、とても喜んでいて、私たちに会うのをとても楽しみにしていました。糖尿病もわずらっていたので、食べたい物も食べることができず、水分さえ制限されて、とてもかわいそうでした。施設の中では、たくさんの催し物があったり、楽しい行事がたくさんあったので

すが、あまり楽しんでいる様子はありませんでした。きつと、すぐくさみしかつたのでしよう。どんなに楽しいことがあっても家族と離れて暮らす苦しみは、私たちが思うよりずっとずっと深いものだったのでしよう。時々、私と妹の名前をまちがえたり忘れてしまうこともありました。ある時、母が、曾祖母にこんなことを聞きました。

「忘れてしまうことをこわいと思ったことはある。」
すると、曾祖母はこう答えました。

「もしも、私がすべてを忘れてしまっても、みんなが私のことを覚えていてくれたらそれでいい。忘れることよりも、忘れられることのほうがこわい。」

その言葉を聞いて涙が出ました。曾祖母の言葉は、いつも私の心を動かします。誰かの一言で、これからの自分の生き方まで変えてしまう。言葉とは、そういう重要な物なのだと思えて感じました。

施設には、一人では生活するのが困難な人がたくさんいました。車いすに乗り一人で歩くことができない人、ご飯を自分では食べられない人、寝

たきりの人、またトイレに行けない人はおむつをし、それらを全て手助けしている人がいるということ。家族でも、手助けすることは大変なことなのに、仕事とはいえ施設で働く人たちはすごいなと思いました。ここでは、一人で生活できない人たちの人権が、確かに守られているのです。歩けない人を車いすに乗せておくのではなく、リハビリをして少しでも歩けるように練習したり、寝たきりの人は体の向きをまめに変えたり、手足を動かしたりする。トイレに何度も連れて行っておむつに頼りすぎないようにする訓練や、ぬり絵に習字、折り紙など、障害や体調に合わせて色々考えられた生活スタイルが提案されていました。

私たちも必ず年を取ります。いつか自分も同じように、誰かの手を借りて助けてもらいながら生きていかなくはならない日が来るのです。今までも一人で生きてきたわけではありませんが、自分の意思とは裏腹に、やりたいこともできない、思うように体が動かなくなる時が来るのです。だから今、自分ができることは何か、自分がそうなった時、どうしてほしいか。そういう風に考えると、

もっと人に優しくできるのではないのかと思いましたが。

平成二十七年四月、曾祖母は他界しました。色とりどりの花が咲きほこるこの季節、母が、歩けなくなつた曾祖母を背負って一緒に桜を見に行つたことは、忘れません。そしてこの季節が来るたびに、お花見に行くたびに、曾祖母と過ごした日々を思い出すでしょう。高齢者が住みやすい生活環境を整えるために、介護施設だけではなく、地域が協力し、福祉設備の充実した町づくりをしていくことが必要なのではないかと感じました。高齢者が安心して生きがいのもてる暮らしができるように、身近なところから私も協力していきたいと思いました。最後にこのような経験から、私が感じ学んだことを一文にし、書き残したいと思えます。「誰かのためは自分のためになる。思いやりは、優しさに変わり、自分の心を豊かにする。」この言葉を多くの人たちへ伝えていけるようにたくさん活動をしたいと思いました。

言葉は鏡

中 一

「あのね、言葉は鏡みたいなものなの。優しい言葉でニコニコ話しかけてみてごらん。きつと笑って優しい言葉を返してくれるから、絶対に友達になれるよ。」

と幼い弟に母がそう話していた。幼稚園の弟が進級した新しいクラスの中に、みんなに嫌なことを言う子がいて、

「遊ぶのは嫌だな、嫌い。」
と弟が言っていたからだ。

ぼくは小学生のころ、母が同じように言葉を鏡に例えて話してくれたことを思い出した。一年生の時から野球チームに入り、毎週土日は朝から夕方まで一生けん命頑張っていた。ただ、ぼくはひどい乾燥肌で秋ごろから冬の間は手荒れがとてひどく、病院でたくさん薬を出してもらうほど悪化するアレルギー性皮膚炎になる。手のあちこちが切れ、痛くて眠れないときもあり、夜は薬を何

種類もぬって手袋をする。朝に外すと少し良くなっているけれど、学校へ行くとまた切れて悪化する、の繰り返しだ。好きな野球も、ボールが持てない、バットがにぎれない。そんなときは、ぼくだけマラソンや見学になり、つらかった。しかし、もつとつらいことがあった。外の乾燥した空気にさらされたぼくの手は、血行が悪くなり黒っぽく、ガサガサと皮がめくれて炎症ではれてしまう。そんな手を見たチームメイトに、

「うわっ、気持ち悪い。人間の手じゃなくて、ゾウの手じゃん。」

と笑われたことがある。その子は、ほんの軽い気持ちで言ったのだと思う。しかし、ぼくはとてつらかった。気にしていることであり、自分ではどうにもできないことだからだ。それからも、
「げっ、血だらけ、こわっ。」

とか、
「何でそんな手になるの、やばっ。」

などと言われたりした。くやしく思っていたぼくはある時、
「○○なんか○○じゃん。」

と、その子が嫌がり気にするだろう言葉を言ってしまった。気にしていることを言われてぼくは傷付いたのだから、悪いとは思わなかった。しかしなぜか、言葉の仕返しは全然すつきりせず、さらに嫌な気持ちになった。そのことを母に話したら、「相手の気持ちを考えて言葉にすれば優しい言葉で返ってくるし、思いやりのない言葉を言えば、心ない言葉で返ってくると思う。そして言葉は、乱暴に使ったり、扱い方を誤れば割れてしまい、その鋭さで相手を傷付けてしまうの。だから大切に使わないといけない、鏡みたいだね。」と教えてくれた。

ぼくは、心ない言葉を言ってしまったチームメイトに、「ごめん。」

と謝った。そして、気にしているから手のことをもう言わないでほしいと伝えた。そうしたら、その子も、「ごめん。」

と謝ってくれて、それから、「大丈夫？」

と心配する言葉をかけてくれるようになった。皮ふ炎の悪化は野球が原因ということもあって、四年生で野球を辞めることになったけれど、今でもチームメイトは大切な友達だ。

言葉にはすごい力があると思う。心を込めた一言で人を元気づけたり、生きる力をあたえることもできる。その反対に、心ない一言で簡単に人を傷付けたり、生きる気力をうばってしまうことさえもある。言葉で負った傷は、言った相手の目には見えないけれど、とても痛いのだ。人はだれにでも顔や身体の特徴があって、本人ではどうしようもできないこともある。それを責めるのではなく、認めることが大切なのだと思う。

ぼくは、相手の気持ちや立場を考えて温かい言葉をかけられる人になりたい。

「言葉は鏡」

思いやる心をもって、大切に使っていこうと思う。

私の心の友

中 一

「遊ぼう。」

私は幼い頃、ある男の子の家に曾祖母と姉と行くのが保育園帰りの日課だった。その友達は、重度の障害のある人で寝たきり。車いすも固定していないと倒れてしまう程。あとから母に聞いておどろいたのだが、同年代だと思っていた彼は、十才だったそうだ。生まれつき、小児まひで体も保育園児と同じ位で、私と同年代かと思つて仲よく遊んでいた。彼は、体が不自由で話もほとんどできないので、ままごとをする時もいつも私が主導権をにぎっていた。となりで笑っているだけ。一人で遊んでいるみたい。両親が共稼ぎで、曾祖母と姉の三人で過ごすのもつまらないので、ジュースとおかしをもらいに行っていたようなものだった。しかし、大きくなるにつれて、私にも保育園の友達と遊びたいという思いが芽生えてきた。その彼の家に行くのがゆううつになり、足が

遠のいた。しばらくしてスーパーでおばさんにバッタリ会った。

「かわいそうに哀れな目で周りの人は近づいてこない。でもあなたは、遊ぼうって毎日のように来てくれて、何もできないあの子に笑顔をくれたことを、本当にうれしく思っているのよ。また、遊びに来てやってね。」

私は、今までの自分がはずかしいと思う。体が不自由で寝たきりの彼は、ゆいいつの友達の私と姉を心待ちにしていたくれたのに。

それから、また遊びに行くようになった。保育園で習ったおゆうぎや歌などをみせたり、手話を覚えてくると指の動かない彼の指をとり、先生になった気分で教えたりした。体調がいい時には、運動会や生活発表会にも来てくれた。心ない友達が、

「何あの子、誰の友達？かわいそう。」
と言っていた。私は胸をはって、

「私の友達。」

と言った。かわいそうなんかじゃない。彼なりに楽しいことを精一杯表現できる素晴らしい子だよ

と心の中でつぶやいた。

おばさんが、

「分けへだてなく接してくれるあなたをうれしく思う。」

と言ってくれたことを本当に光栄に思う。

障害のある人、障害のない人という見えないかべを作らず、誰に対しても偏見をもたず、困っている人がいたらかわいそうではなく、「大丈夫ですか？何かお手伝いしましょうか？」と声をかけたと思う。

中学生になり、部活も勉強も大変だけど、私は、自分自身が精一杯できることを頑張ろうと思う。だから、私は弱音をはかないと心に決めた。私の面倒をみてくれた、曾祖母も彼も他界してしまったけれど、二人の分も一生けん命生きていこうと思う。

海を渡った僕のランドセル

中 一

みなさんは「思い出のランドセルギフト」という活動があるのを知っていますか。それは使われなくなったランドセルをアフガニスタンの子供たちに寄贈し、子供たち、主に教育の機会に恵まれない女の子の就学に役立てる活動のことです。

今年、僕のランドセルはアフガニスタンに向けて出発しました。僕のランドセルは、六年前祖母がプレゼントしてくれたものでした。僕は六年間このランドセルと共に小学校に通いました。

最初は、まだ使えるしもったいないなという軽い気持ちからでした。でも調べていくうちに、この活動はランドセルを使ってもらうだけでなく、もっと重要な意味があることがわかりました。

アフガニスタンには、学校に行けない女の子がたくさんいます。日本から贈られたランドセルは、女の子たちが学校へ行くきっかけになります。女の子たちが読み書きができるようになりますと、健康

を守ったり、保健や衛生に関する知識を身につけることができます。ランドセルは大きく光っていて目立ち、今ではその姿が学校へ通う子供たちの象徴となっているそうです。

僕は遠いアフガニスタンの子供たちについて深く考えました。戦争が続き、多くの子供たちは学校にも行けず、行くことさえもあきらめてしまっている現状を、僕たちがランドセルを送ることで少し改善できるのです。たとえ小さな力でも集まれば大きな力になるという言葉の意味が、少しわかったような気がします。僕たちが今できることは、世界の全ての人が平等に教育を受け、安心して暮らせるようにするためにはどうしたらよいか、考え続けることだと思います。

そして、僕の思い出のランドセルが、遠くはなれた国で、だれかが夢へ向かって進むのに役立ってくれたら、とてもうれしいです。

自分らしく

中 二

「もう少し、女の子らしくできないの？」

この言葉は、私が小さいときに親や祖母によく言われた言葉です。私は兄に付いて回るが多かったので、人形を買ってもらっても外でサッカーをして遊んだり、座るときもあぐらだったり「男の子っぽく」育ちました。そのせいもあつてか、いたずらをして怒られることは日常茶飯事で、そのたびに「女の子らしく」と言われてきました。私は、その言葉が大嫌いで、何度かその怒りをぶつけたことがあります。

「女の子だとサッカーやっちゃいけないの？」

「なんで私はだめでお兄ちゃんはいいの？」

今思えば、私のことを考えて言ってくれていたのだと思います。しかし、私は、「女の子らしく」という言葉が自分を縛る太く重い縄のように感じ、自由を奪われてしまったようになりませんでした。小学校に上がり、サッカーをやるようになりま

した。休み時間にサッカーで遊ぶと、

「お前、男みたいだな。」

と言われることがありました。

「だったら何だ。サッカーやって何が悪い。」

と口では言っていたものの、内心は男子と女子でこんなにも高い壁があるのか、と思いました。また、男子と女子で腕ずもうをして、男子が負けたときに、

「男のくせに弱いな。」

「女にも勝てないのかよ。」

という声があがりました。男と女の性別が違うだけで比べられ、そこからけんかになることもありました。女の子だってサッカーや野球をする子はいるし、男の子だって力の弱い子やおとなしい子はいます。人には長所があり、短所もあるのは普通ですが、男の子らしくないから、女の子らしくないからだめだ、というのは普通なのでしょうか。

私のクラスでは昨年、道徳の授業で「男らしい、女らしいとは何か」について考えました。「男らしい」では、「強い、足が速い、頼もしい」、「女らしい」では、「おとなしい、料理ができる、優しい」

という意見が出ました。そこで、「男らしく、女らしくしなくてはいけないか」考えたところ、「無理に変える必要はない、自分が一番」という意見が出ました。私は、そんな意見を聞いて、なんとなく嬉しくなりました。女らしくと言われても、男みたいだと言われても、変える必要はないと思えたからです。

昔は、男は、強くたくましく働きに出て、女は、静かでおしとやかに家業に専念していました。男らしく、女らしくないと結婚もできませんでした。しかし、今は男だって育児をします。女だって働き、社長になる人もいる、そんな時代です。個性を変える必要もなければ、他人の個性を否定する権利もありません。私は、今でもサッカーが大好きだし、座るときは、あぐらが楽でよくあぐらをかいています。私は、自分自身を変えるつもりはないし、たとえ、誰に何と言われようと変えません。たとえば、将来の夢はケーキ屋さん、という男の子と、将来の夢はプロレスラーになること、という女の子がいたらどんなことを思いますか。私は、男の子なのに、女の子なのに、というのが

第一印象になると思います。でも、よく考えれば、ケーキ屋、つまりパティシエで有名なのは、男性のほうが圧倒的に多いし、アイドルと兼業している女性のレスリング選手だっているのです。もし、自分がそういう人たちに、

「男なのに、女なのに」と言って夢を壊してしまつたら、と思うとゾツとします。ケーキ屋さんという夢、レスリング選手という夢。周りが何と言おうが、その人たちの素敵な個性であることに変わりはありません。

金子みすずさんの「私と小鳥と鈴と」の詩の中で、「みんなちがってみんないい」という言葉が出てきます。世界には約七十億人もの人がいて、七十億の個性があり、それは誰一人として同じではありません。みんなが同じだったら楽しい生活なんて送れないと思います。もし、実験に興味のある人がいなかったら、何の発明もなく、世界は進化できません。もし、全ての人の意見が同じだったら、話し合いはいらないし、対立することもないつまらない毎日になるでしょう。「みんなちがってみんないい」みんなが違うからこそ、今の世界

が成り立っているのです。私にも当然、長所や短所、得意や不得意があるけれど、全て自分として、これからの自分を作り、磨いていきたいです。

人と違うということ

中 二

私は、日頃から人種差別ということを感じて生きてきた気がします。

私は、アフリカ系の父と日本人の母との間に生まれたハーフです。当然のことながら私の肌の色はみんなとは違います。そのためなのか、小さい頃に、からかわれたことがあります。今でも、すれ違う人が私のことをめずらしいものを見るような目で見ることがあります。このようなことで、嫌な思いをすることがあります。

嫌なことは世界のニュースでも知りました。アメリカでは、白人警察官が無抵抗の黒人を射殺する事件がありました。最近このような種類の事件が続けて起こっているようでした。

これらのニュースがきっかけで、人種差別について、家族で話し合うことができました。

家族は、私が生まれる前に考えていたことがあるそうです。それは、私がハーフであることで、

他人から偏見の目で見られることや、友達からのいじめにあうことなどについてです。けれども、両親や姉は、

「一番大切なのはハーフであることや、肌の色や言葉の違い、環境の違いではない。生まれてくる子どもは、それぞれの課題をもって生まれてくるのだから、平等に幸せになる権利をもっていることだ。」

と言っていました。そして、乗り越えなければならぬ外見的なものを与えられて生まれてきたと思うのではなく、自分こそ世界の人と人を結ぶ架け橋になっていくのだと自信をもって生きてほしいと願っていたそうです。さらに、私に、

「Aは、それができると信じているので、世の中のためになれる人になってください。」

と言いました。私は、家族から信頼されていることに気付き、自信がもてました。

家族との話し合いの後で考えたことがあります。それは、確かに世界には人種差別はあるけれど、その違いを認めてくれる人もたくさんいるということです。私の場合、自分の存在を認めてくれる

家族や友達や先生がいます。たとえば体育祭の時にかけ声を任せてくれたり、皆と同じように接してくれたりします。仲間の一人として見てくれます。

そんな仲間の一人の発表に感動したことがあります。その子は、ダウン症の家族についての作文を全校生徒の前で発表しました。私がどこに感動したかといえば、家族を守ろうとする家族愛と心の強さです。私には、その強さが足りないと感じました。偏見や差別に立ち向かう強さが必要だと思いました。私は、その子に教えられたのです。

振り返ってみて、私はどうだろうと考えてみました。私自身は、他の人と肌の色が違うという思いがいつもあつたので、そのことで悩んだことがあります。

人種差別とは、私が克服すべきテーマなのかもしれません。この作文を書くことで自分の問題にしっかりと向き合おうと思いました。

人と違うことは、その人の個性だと思えます。人間は、一人として同じ人はいないと思えます。人と違うという部分は、人権に限らずいろいろあ

ると思えます。たとえば、考え方や食べ物の好き嫌いなど様々あると思えます。人と違うことを責めたり、嫌ったり、また、人と違ういうことで自分を責めたり、嫌ったり、そんなことで悩むよりも、もつといろいろな人と交流をしてみたいと思います。

人と違ういうことは決して悪いことではないと思えます。そもそも人種に関係なく、私たちは皆同じ人間なのだから。そして、皆平等なのだから。

人それぞれの個性

中 二

私は、みんなと違うところが一つあります。それは、「足の指」です。足の指の形がみんなと違うのです。私はこの指が原因で、とても悲しい思いをしたことがあります。それは小学校二年生のことです。

ある日、私の指を見た友人に、「なに、その指。そんな指だと死んじゃうんだよ。テレビでやってたんだよ。」

と言われたのです。そのとき私は、

「こんな指してると死んじゃうの？何でこんな足で産まれてきちゃったんだろう。」

と不安になりました。そして家に帰って泣きながら母に

「何でこんなふうに産んだの？私、死んじゃうの？」

と詰め寄りました。そのとき母は私を抱きしめこ
う言いました。

「ごめんね。大丈夫だよ。死んだりしないよ。」

私はその時小学校二年生で、その後どうしたのか覚えていません。しかし、今思うのは「なんであの時、母を責めてしまったのだろう。」という後悔です。指の形が変わっているのは誰のせいでもありません。もちろん母のせいでもありません。それなのに私は、母を責めてしまいました。傷付いた悲しい気持ちを母にぶつけることしかできなかったのです。

それから自分が成長していくにつれて「みんな人それぞれの個性があつて良い。」と今では思います。しかし、そのときは、私の心のどこかで「足の指を見られるのははずかしい。また何か言われたらどうしよう。」という不安な気持ちをずっと引きずっていたのです。

そんな私に転機が訪れました。あのことがあつてからずっと隠し続けていた指のことをクラスメイトに打ち明けることにしたのです。小学校五年生では、夏に林間学校という宿泊学習があり、秋には運動会ではだしになる機会もあつたからです。母と担任の先生とも相談しました。たくさん悩み

ました。また二年生のときのように言われたら、
という思いが何度も頭をよぎりました。そして悩
んだ結果、このことをみんなに伝えてもらえるよ
うに担任の先生にお願いをしました。

「Aさんは、足の指がみんなと少しだけ違います。
それでもみんなと何も変わらないんですよ。」

と先生はクラスの人々に伝えてくれました。み
んなは少しびびったりした様子でしたが、そのあと
友人やクラスメイトのみんなは普通にいつも通り
接してくれました。私は不安な気持ちが少し楽に
なった気がしました。

その後、友人から、

「私も生まれつき、ここがこうなんだよ。」

と打ち明けられて思ったのです。

「ああ、みんなそれぞれ違うけどみんなもいろん
な悩みや不安をもっているんだ。」

この経験から私はいくつかのことを学びました。
人にされて嫌なことは自分でもしないこと。お互
いの個性を認め合うこと。この世の中にはいろい
ろな個性があります。金子みすずさんの「私と小
鳥と鈴と」という詩には「みんなちがってみんな

いい」という一節があります。私はその言葉が好
きです。みんなそれぞれ違うけれどもみんなそれ
ぞれの個性があつて良いということだと思えます。
世の中の人が、みんなそれぞれの個性を認め
合えば、傷つく人は少なくなるのではないでしょ
うか。

学校生活でも個性を認め合えず、傷付き傷付け
られている人がいます。遊び半分で言った言葉も
いついじめになってしまふのか、言った本人はわ
からないかもしれせん。ちよつとした遊び半分
で発した言葉でも、言われた相手がこの言葉に傷
付きいじめだと思えば、それはいじめになります。
傷付いた心はその言われた本人にしかわからない
のです。

私は、小学校二年生のとき言われた言葉で深く
傷付き、今でも忘れることはできません。

しかし、私は、この経験があつたから強くなれ
たところもあると思います。それまでは、嫌なこ
とがあつても、うじうじと一人で悩んでいるだけ
でした。これからは嫌なことは嫌だと、自分の意
志をしっかりと伝えられるような人間になりたいで

す。そして、自分の体験を生かし、差別やいじめをなくして、みんなが個性を認め合える社会をつくれればいいなと思います。

心のバリアフリー

中 二

乙武洋匡さん、国枝慎吾さん、そして私。三人の共通点、それは車いすで夢をかなえるために積極的に生きていることです。

乙武さんは「五体不満足」などの著作や小学校教師の経験からテレビにも多く出演しています。国枝さんはプロの車いすテニスプレイヤーで、世界ランキング一位の選手です。乙武さんの行動力と人間としての魅力は言うまでもありません。国枝さんの世界一の車いす操作やテニスのテクニクはプロのスポーツ選手そのものです。

しかし、彼らがどんなに活躍していても、車いすの人イコールかわいそうな人というイメージが世の中から消えないことは、とても残念なことです。

私は病気のため二歳から車いすで生活しています。みんなと同じようにできないこともたくさんありますが、幼稚園、小学校、中学校と普通の子

供たちと一緒に生活し、学んできました。

私には三才上の兄がいます。両親は兄と私を同じようにたくさん愛情を注いで育ててくれました。小さな赤い車いすに乗っているいろいろな所に出かけると、誰とでも笑顔で仲良くおしゃべりする子だったそうです。また、兄は学校から帰るとたくさん友達を家に呼んで、私も一緒に遊んでくれました。だから私にとって学校に行って勉強して、友達と遊んでというのは当たり前のことでした。「車いすの子がいるよ。どうやって接すればいいのか？」進学するたびに車いすの私に対する人の目が語っていました。

車椅子で生活していると、不便なこと、悔しいことはたくさんあります。段差や階段は学校や街中のいろいろなところにあって、乗り越えられません。スポーツや学校の授業でも、みんなと同じようにはできません。人混みで身動きがとれなくなったり、林間学校や修学旅行で山登りができなかったりして、一人で待っている時は悔しくて泣きたくなりました。デイズニーランドで乗れないアトラクションもあります。外出すれば、じろじ

ろ見られたりします。

人はなぜ、障害があるとかわいそうな人と思っ
てしまうのでしょうか。それは普通ではないという
勝手な偏見があるからではないでしょうか。目が
悪い人がメガネをかけるのと同じように、足が不
自由だから車いすで移動するのです。どちらも生
活を改善するための大切な道具ですが、メガネは
多数派で、車いすはごく少数派だけなのです。

乙武さんは自分の不自由な体を個性と語ってい
ます。私の通う中学校では、車いすと言えば私の
ことだとすぐわかるでしょう。それが私の個性。
みんなと違うけれど、私の個性は学校でも地域の
人たちにも受け入れられています。

先生たちは、何でもチャレンジできるように
ルールを考えたり、工夫をしてくれたりしました。
クラスでは、

「車いすなんて関係ないよ。」

「友達なんだから、当たり前前でしょ。」

と言って、一人のクラスメイトとして接してくれ
ています。通院のため学校を休めば、明日の連絡
を教えてください、ノートを貸してくれたりしま

す。

私が学校で勉強して、歌って、走ったり、ダン
スをしたり、おしゃべりや冗談を言って笑ったり、
行事も普通にできることを周りが理解してくれた
のです。「なんだ。普通でいいのか。」みんなの気
持ちがそんな風に変わるのには、いつもそれほど
時間がかかりませんでした。みんなと違うのは自
分の足で動くか、車いすで動くか、ただだからで
す。

五年後には、東京オリンピック・パラリンピッ
クが開催され、日本中の多くの人に障害者スポー
ツが理解されるでしょう。そのためには、建物を
バリアフリーにしたり、専用の設備を造ったりす
るだけではだめだと思います。

心のバリアフリーという言葉があります。周り
に障害のある人や外国人がいたら、敬遠しないで
心の壁（バリア）を無くして、普通に接してほし
いです。困っていたら、声をかけたり、手を差し
のべてほしいです。障害があっても無くても人生
を楽しむこと、社会のために役立つことが当たり
前の世の中にしていくためには、心のバリアフ

リーが必要なのです。

乙武さんも国枝さんも、車いすで前向きに生きて夢をかなえられたのは、家族の深い愛情と理解があったからこそです。もちろん私の家族も同じです。相手を大切に思っけて支え合っけていくことを教えられました。だから、友達にも先生にも恵まれました。

私は自分が周りの人に支えられているように、大人になったら困っけている人の気持ちを理解して、一緒に考え、助けて、笑顔にできるような仕事に就きたいと思っけています。

ベンチからの支え

中 三

私がまだ小学生のとき、従姉妹の家に遊びに行った。そこで、三つ年上で中学二年生の従姉妹が、ちょうど学校の練習試合があると聞いて部活動の試合を少しだけ見に行った。従姉妹は、女子バスケットボール部に所属していた。従姉妹だけでなく、他の選手もみんななかつこよく、とにかく一生懸命、楽しそうにプレーしていた。

そこで、少しおかしいことに気付いた。ある選手がシュートを決めて、拍手で盛り上がっている中、ベンチの方を見ていると、一人だけ試合に出ている選手がいた。その選手を何気なく見ていると、試合に出ている選手にたくさん指示を出したり、たまには叱つたりもしていた。私はその時、「何で試合に出ているのに、一生懸命プレーしている選手に対して怒るのか。」と不思議に思っていた。先に従姉妹の家に帰りくつろいでいると、疲れた様子で従姉妹が帰ってきた。私は、従姉妹とテ

レビゲームをしたり、猫とたわむれたりしたが、さっきの試合のことが気になっていた。思いきって従姉妹に、試合中、ベンチにいた選手について少し聞いてみようと思った。そうしたら従姉妹が、「ベンチにいた子はね。Aちゃんと言うんだけど、生まれつき身体が不自由なんだって。でも、バスケが大好きだから、試合に出られなくても続けていくんだって。」

そういう思いもよらない答えが返ってきてびっくりした。私は、バスケットボールが下手で試合に出られないのだと思っていた。だから、試合に出られない理由を勝手に決めつけていた自分に苛立ちを感じ、自分が情けなく思った。よく考えてふり返ってみると、Aちゃんは怒るだけではなかった。試合中は細かくノートに記録し、ベンチに帰ってきた選手には指示をし、すかさず水筒とタオルも渡していた。Aちゃんはチームの一員として、自分ができることを一生懸命やっているのだと初めて気付いた。と同時に、かわいそうとも思った。あれから何年か経って、私自身も中学三年生になり、部活動ができる期間もあと少しになった。

よく練習試合や大会があり、そのたびに相手チームのベンチを見ると、試合に出られなくて、暇そうにしていたり、応援をしない選手を目にした。その姿を見たとき、ふと昔見ていたAちゃんを思い出した。「Aちゃんのように、全力で応援するのがかっこいいのにな。応援をしない選手は、もつたいたいな。」と思った。Aちゃんが試合に出られなくても、自分のできる限りを尽くし、チームのために影で支えている姿を、私は見習うべきだと思った。

このような体験をして、世の中の人々にも、かわいそうというよりも、「もつとその人の良い所、頑張っている姿を見つめてほしい。」と、私は心から思う。その人から学ぶことはたくさんある。だから、「人から学び、身体の不自由な人と支え合って、その人の『本当の姿』を見てほしい。」と思った。

今の自分にできること

中 三

親から生まれて、親に育ててもらい、今こうして一人の人間として生きている。今こうしてここに存在している。みんなは、それを幸せだと感じているだろうか。

私がこういうことを考えるようになったきっかけは、母と見ていた夕方のテレビ番組だった。「虐待されている子どもたち」というテーマで、親から暴力を受けて養護施設に入所している子供たちにインタビューをしていた。虐待されていたので、体中に傷などがあつた。激しい暴力を受けたり、ご飯を食べさせてもらえなかったり、中には命を落としてしまつたりと、耳をふさぎたくなるような現実があるということを知らされた。

「きつとお母さんは、僕が嫌いだったんだよ。言うことを聞かなかつたから。」

普段親に反抗的な態度をとってしまう私にとってこの言葉は深く心にひびいた。その子と自分は、

まったく関係のないものとは思えなくなってしまう言葉だった。

「私がいて迷惑だと思ったことある？うるさいって思ったことある？」

私は母に聞いた。すると母は笑つて言った。

「そうだね。小さい頃、いっぱい泣いてて疲れたね。」

私はこれを聞いてとても申しわけなくなつた。

「でも、お母さんになるってそういうことだから。

言うことを聞かないからって逃げるのは、母親

失格だよ。そんなことするんだつたら、最初から親にならないでほしいよね。」

私はお母さんって立場ではないけれど、とても共

感し、感謝の気持ちでいっぱいになつた。

「そうだよね。ありがとう。」

自然にこう言えた。

夏休みの宿題で新聞を読む機会があつた。毎日、新聞を見ていると、小さい記事だが、親の虐待で子供が亡くなつたという記事が多いことに気が付いた。それらの記事を見ると「子供が言うことを聞かなかつたから。」「しついでやった。」と書かれていた。虐待をされた子供は、人を信じなくなつ

たり、人に反抗的な態度をとったりする。だからしつげと言っても意味がないのだと考えられる。親はそれをわかっていないはずなのだ。では、なぜ虐待をするのか。結局は自分のためなのだ。自分の都合、自分の気分で子供を傷付ける。それだつたら母が言っていたように、最初から親にならないでほしいと思った。そして同時に親になることの大変さを感じた。

テレビを見たり、新聞を読んだりすると、ふと虐待について考えさせられる瞬間がある。それをかき消してしまうのは簡単だが、深く考え自分に行うことができることはないかと考えることも難しくないはずだ。「かわいそうに。」「大変だろうな。」と同情するのではなく、親が自分を生んでくれたことに感謝したり、限りある命を大切にしたりすることが大切なことなのではないだろうか。直接関わることは難しいかもしれないが、感謝はできると思う。

私が将来親になって子供ができたなら、自分も子供も幸せでありたいと思う。そのためには、子供の気持ちを理解し、わかってあげることが一番だ

と思う。でも、自分が親になったとき、それを実行できるか、本当に子供の気持ちを優先に考えられるかと言われると、悩んでしまう自分がいる。それは、私だけではないはずだ。だからこそ、未来の自分に呼びかけたい。中学生のときに私が感じたことを思い出してほしい、と。「命の大切さ」「親子になれたことへの感謝の気持ち」そして、同じ悩みをもつ人と話し合ったり、相談したりして、冷静になること。この思いは自分だけではなく、自分の子供にもまた、次の世代にもつなげられたらいいと思う。

そんな一人一人の小さな思いから、虐待のない誰もが幸せな世界になっていくことを願っている。

支えて応援する

中 三

私は小学校一年生の時からダンススクールに通っています。そのスクールには、障害のある子供たちが集まるクラスもあります。私たちのレッスんとすれ違いにレッスンがあるので、毎回接することになります。ダンススクールの先生から毎回のよう、

「しっかりと見守ってあげてね。」

と言われてきました。そこで私は、「平等な目で見ないといけない。」と思うのですが、心で思っているだけでも、観察をするようにじっくりと見てしまったりして、「平等に」と思えば思うほど、私の行動はぎこちなくなってしまうのでした。このような思いを、九年間ずっともち続けていました。時には、急に走り出すといった突然の行動を、不快に思うこともありました。また、普通に接することできない自分腹が立ったことも何度もありました。「普通に」「普通に」と考えれば考えるほど、

「平等に」ということがとても難しく感じてしまうのでした。

そんな私の考えをすっきりさせてくれたできごとが、今年の四月にありました。私の学校にも「しえん学級」ができたのです。新入生に学校を紹介する生徒会行事の中で、「しえん学級」の担任の先生からこんなお話がありました。

『しえん学級』の『しえん』という字は、漢字ではなく平仮名で書いています。し・え・んという言葉は、漢字で『支援』と書きます。支援の『支』という文字は、支えるという意味で使われます。支援の『援』という字は、援助する、応援するという意味で使われます。東日本大震災の時に『復興支援』という言葉をよく聞きました。それと同じです。『しえん学級』の子には、みんなより少し支えが必要なだけです。ぜひ『しえん学級』の子に関わってあげてください。自分から声をかけづらいつきには、先生に教えてください。それも支えて応援してあげることになるのです。」

私はこの話を聞いて、「あっ。」と思いました。「平

等に見ないといけない。」そう考えるのではなく、「応援しながら支えて、温かく見守る。」このような考えがあったのかと思うと、今まで重苦しかった心がすうっと軽くなってきたのです。

先日、ダンススクールの発表会がありました。障害のある子供たちが集まるクラスも、たくさんスタッフの方々に支えられながら、楽しそうに発表をしていました。温かく見守ろうとしていた私が、逆に、温かい気持ちにさせられていました。

自分たちと違うから「平等」にしなればという気持ちだが、「差別」につながってしまうのではないかと考えさせられました。相手を理解した上で、「支えて応援する」という考え方が大切だと思いました。それが、「人権」を守ることにつながるのだと感じました。

現状

高一

今、日本で起きているいじめの現状を把握している人は、どれくらいいると思いますか。わたしは、日本の人口の千分の一以下だと考えています。なぜなら、最近のいじめは卑劣で巧妙なものになってきているからです。

最近のいじめの手口や方法は計算されたものになっていきます。例えば、親は自分の子供が四日連続で怪我をして、さらに持ち物がなくなつて家に帰れば、何かあったと異変に気付くはずで。しかし、持ち物がなくなつた一週間後に怪我をして帰つても、それがつながっているように感じるでしょう。いじめは周囲に気付かれないように、時期をずらすなどの巧妙な手口に変わってきています。このような現状を思い、わたしは、そのことで悩みをため込んでしまい、子供たちが自ら命を絶つてしまわないかが心配です。

わたしは、以前いじめを受けていました。その

時は、陰で悪口を言われ、「菌」扱いされてきました。SNS上で悪口を書き込まれたこともありました。

しかし、わたしは、被害者であつただけではなく、加害者でもありました。その時、わたしと同じようにいじめられている人が他に三、四人いました。その中でいじめの対象が日によってくると変わっていくのです。自分が少しでも、いじめの対象にならないように、いじめを受けるのが怖くて、加害者と一緒になつて他の友達をいじめていた時もありました。ですから、自分がいじめを受けていることを、周りには決して言えません。これもいじめの現状として受け止めなければならぬと思います。加害者としての仲間意識があるために周りに言えず、わたしは一人で耐えることしかできなくなりました。

わたしがいじめを受けるようになってから二年が経つたある日、わたしをいじめていた子がわたしに向かつて謝ってきました。その時わたしは許すことができませんでした。なぜなら、わたしは、二年前にいじめを受け始めてから人間不信になり、

友達すら信じられなくなっていたからです。わたしがずっと悩んでいたこの二年間を、この人は自分の友達と楽しく笑って過ごしていたのかと思うと、嫉妬の気持ちが増えってきました。しかし同時に、いじめを受けていたころを思い出してしまい、ここで許さないと、また、いじめを受けるのではないかとも思いました。そして実際に口にした言葉は、「いいよ、気にしてないから。」でした。

いじめを受けた側は、そのことをいつまでもはつきりと覚えています。何をされたのか、何を言われたのか、心を傷付けられた全ての行為を覚えていきます。加害者が忘れていても、いじめを受けた側は、一生苦しみ続けていきます。いじめというものは、人生を大きく左右するものです。わたしは、いじめられてから友達ができなくなり、心の浮き沈みが激しくなりました。そして当時は、毎日のように死にたいと思うような、暗い日々を送っていました。今でもそれは辛い記憶です。

わたしはこのような現状を変えていかなければならないと思います。それには、どうすればよいでしょうか。いじめをなくすには、一人がいじめ

に立ち向かうのでは意味がありません。いじめられている人は周りの人に助けを求めています。周りの人も共にいじめに立ち向かえるように、その人といじめから目をそらさずに見てください。しっかりと見ていればその人の変化や助けを求めるサインに気付けると思います。そのようにして、いじめと闘っている人を一人でも多く助け出して、その人たちの大切な命を守ることが、わたしたちが今すぐにでもできることだと思います。あなたの勇気で現状を変えてみませんか。一人でも多くの人が協力してくれるように、わたしは、この思いを広げていきたいと思っています。

私の弟

高一

私には、弟が一人います。私の弟は障害があり、特別支援学校に通っています。現在六年生です。弟は少し勉強が遅れたりしています。弟は、小学一年生の時から、特別支援学校に通っていて、入学した頃は、字も読めないし書けないし、落ち着いて座っていることができるのかを心配するくらいでした。

一年生の時のクラスメイトは三人で少人数でした。でも、そのクラスで過ごすうちに弟も段々と集団行動に慣れ、落ち着いた行動もとれるようになりしました。三年生、さらに四年生になった頃には、ひらがなの読み書きができるようになり、カタカナも書けるようになりました。

しかし、弟には独特のこだわりがあり、困ってしまうことがあります。弟は、買い物に行つてレジに並ぶ時は必ず一番レジに行くのだとこだわっています。一番レジがたまに閉まっていることが

あるとパニックを起こしてしまいます。その時は、怒って騒いでしまいます。すると、周りにいる人たちはみな一斉に私たちの方に視線を向けて来ます。身近に障害のある人がいないために、障害についての理解がない人は、私たちを不思議な目で見たりします。障害のある人たちは自分が見てきたりした訳ではないのにと私は思います。

障害のある人と接するヘルパーさんや家族は大変だなと思う時もありますが、一番大変な思いをしているのは本人なのではないかと思えます。それはまたお年寄りの場合も同じだと思います。

そのため、私が外出した時に障害のある方や、お年寄りを見かけた場合は助けたいと思えます。

私がこのように思うのは、弟と接しているからだと思います。弟自身も毎日少しずつ成長していきます。日々弟と接しているうちに、私自身の考え方も変わってきたと思います。弟の面倒を見ることは大変だと思ふ時もありますが、色々な発見や良い経験ができて自分の心の成長にも役立っていると思うのです。これからも、弟の応援をしていきたいです。

友達の大切さ

高三

私は、人権問題で重要なことは、友達の大切さや仲間の大切さを理解し、「いじめ」がなくなることだと思っています。

いじめが発生したとき、そのいじめられている人を一番に助け、友達になることが大切だと思います。助けることは、とても大変なことですが、いじめられている人の辛い気持ちや悲しい気持ちを考えて、「勇気をふりしぼること」が、いじめがなくなる一つの方法だと思います。私は、いじめを見て見ぬふりをするのは、いじめている人と同じ立場で同じ罪であると思っています。助けることは悪いことではなく、むしろいいことをしているので、自信を持って助けて、友達になるとよいと思います。

友達や仲間の大切さは、なかなかわからないことが多いです。一人になったとき相談したいことがあってもできない。そのような状況になって、

初めて友達を大切にしなければいけないことがわかり、いじめられている友達がいれば、決して一人にしてはいけないと思うでしょう。

また、普段当たり前のように一緒にいるから気付きにくいのですが、私が、泣きたいとき、辛いときなどを思い出すと、そばにいてくれるのはいつも友達でした。自分が辛いとき、誰もそばにいないと、誰もが辛い気分になると思います。このようなことから、いつもそばにいてくれる友達を大切にして、いじめられている友達がいたら助けなければいけないと思いました。

私は、友達がいることの大切さや幸せ、支えてくれる人がいるというこの大切さを感じています。そして、何より、なんでも相談ができてけんかをしてもしちんと仲直りできて、笑いあえるという存在がいることを、とてもありがたい、いつも感謝しなくてはいけないと思っています。笑いあえる友達がいて、一緒に行動でき、本気でぶつかりあえる友達がいて、心に余裕ができて楽しく過ごせると思います。

私は今回、人権問題について作文を書くにあた

り、いじめとはどれだけ辛いことなのかや普段何気なく一緒に笑いあって一緒に帰っている友達の大切さやありがたさをみなさんに知って欲しいと思います。書き進むにつれ、私にとっての当たり前は、別の気持ちを持った人には当たり前ではないのかもしれないと思いました。私は、友達や仲間の大切さを感じて欲しいと思います。

「ありがとう」という言葉を感謝の気持ちがあるとき当たり前に使うように、笑い合えたときや楽しいとき、友達という存在が当たり前になつていたのではないかと見つめ直すことができました。だから、私はこれから、いじめられている人がいたら、その人の立場になって考え、助けられるような勇氣をもった強い人になりたいと思います。そして、今という時間、友達と一緒に笑い合えているということをお大切にしていきたいです。

自分を見つめて

高三

僕は今、たくさん友達と一緒に話したり、遊んだりして学校が毎日楽しいです。僕は普段車椅子で移動したり、はって動いたりしています。クラスの仲間は七名で、ほとんどが僕と同じように車椅子に乗って生活しています。車椅子には小さいときから乗っているのですが、足代わりとなってもできるようになりました。一人で目的地に到着することや、体育で「氷おに」や「バレーボール」を仲間と楽しむことができます。僕のように足に感覚がなく、歩くことができなくても、車椅子があれば可能性が広がります。

しかし、昔は学校が全然楽しくありませんでした。理由は、小学校では同級生四〜五人に「お前なんてずっと座ってんだよ。立てよ。」や「車椅子なんてするいんだよ。」と悪口を言われたり、車椅子から無理やり突き落とされたりと、いじめを受けていたからです。ですから、僕には友達といえ

る人がいませんでした。いじめを受けすぎて、辛くて死にたいと思ったこともあります。悪口を言われていることやいじめを受けていることは、先生や家族には言えませんでした。なぜなら、先生や家族に心配をかけたくなかったし、言うことが恥ずかしかつたからです。言ったとしても、どうにかしてくれるのか、助けてくれるのかも思っていました。誰にも言えず、一人で辛かったです。僕は一度だけずる休みをしたことがあります。学校に行かずにすんだことにほっとしましたが、親に嘘をついて心配をかけて、ずる休みをしたことを後悔しました。

中学校へ上がる際、普通中学校か特別支援学校へ進学するかを悩み、バリアフリーの特別支援学校に決めました。特別支援学校に進学し、小・中・高校生が同じ校舎で学ぶことに驚きました。生徒数が少なく教員が多いことや、車椅子で生活している人でも入れるプールがあること、寄宿舎に泊まれることにも驚きました。同じように障害がある友達は気さくで悪口を言われるようなこともなく、毎日学び合うことができます。少しの配慮や

ルールを変えることで、体を動かすことや生活することにハンディは生じないのだと気付きました。僕は学校から家までスクールバスで登下校しているところを、民間のバスと電車で帰ることができるようになりました。特別支援学校を一步出ると道にバリアがあり、歩道が斜めだったり、段差があつたり、信号がなかったりと多くの問題があります。車椅子だと視線が低いので車や電車のスピードが速いと感じます。色々なことを一人で乗り越えて嬉しかったし、自分一人のできるんだなと自信が付きました。少しずつ勇気が出てきて、いろいろなことに挑戦することができました。

今年には母に昔の出来事を話してみました。母は「気付いてあげられなくてごめんね。」と言っていました。僕が心配をかけて悪かったなと思いました。

中・高等部の六年間で、昔できなかったことも今はできるようになっています。これからは、自分のことはもちろん、周囲で困っている人や傷付いている人がいたら、力になっていきたいと思いません。

私が逃げていたこと

高三

東日本大震災から四年。「あなたにとって家族とは何ですか」というテレビ番組が放送されていました。私がもし聞かれたら、「守る人」と答えます。

以前は自分は守られていると感じていました。

私は六人家族で、双子の姉、祖父、祖母、母、父と暮らしています。私が車椅子生活のため、家は広く、自分の手の届く位置に物が置いてあります。ドアはスライド式、洗面所は広くて車椅子が入るようになっています。「あなたが大きくなる前に家を取り壊して建て直しをした。」と家族から聞いて、家族の自分に対する心配を、申し訳ないと思っていました。また、てんかんの発作があるため私を一人にしないようにと、たくさんのことが私中心に回っています。

姉は、「家が好きだから。」と言って土日は友達と遊ぶこともなく家にいます。もし私が逆の立場だったならば、土日は友達と遊ぶためにヘルパー

さんに頼み、自分の時間を作りたいと思いますが、姉はそのようなことをせず家にいます。親の用事で二人になることもありましたが、そのとき、必ず親が心配するのがトイレでした。自分で立つこと、歩くことのできない私は、誰かに頼んでトイレに行くしかありません。姉に何回も頼むのは悪い、という感情に駆られてしまい、呼べなくなることもありました。

親に対してもそうでした。母には、気楽に過ごしてほしいと思い、新しい友達はあまり呼びませんでした。休みにはゆっくりさせてあげたいとも思っていました。誰も巻き込まずに家族が楽しめるようにと考えていました。自分のことよりも家族のことを一番に考えていました。しかしそれは間違った優しさでした。それが間違った優しさだと気が付いた出来事がありました。ワクチンの副作用が現れたことによって、生きることと精一杯になったことです。

毎日身体の状態が違い、昨日は元気でも今日は悪く、明日学校に行けるか分からないという副作用で今も悩んでいます。痛み、かゆみ、付随運動、

気持ちの面、幻覚などたくさんその日の状態と闘います。小、中学校のときより休みが多くなりました。

治療方法が見つからないため、母はいい治療法を探し調べるといふことを繰り返しています。そして、その治療費を稼いでくれます。私が早退する時は祖父、祖母が迎えに来ます。その時、お年寄りに迷惑をかけるなんてマイナス思考になります。そしてこれから自分がどうしたらいいのかわからなくなりません。この先、真っ暗だと。しかしその時、身体が良くなったときの家族の笑顔をふっと思い出したのです。その笑顔が見たい。そのためには自分が前向きに笑顔でいなくてはと思います。身体の状態が悪いと笑顔がなくなり、外にも行けなくなりません。その時の落ち込んだ家族の姿を見たくありません。

家族の笑顔を見るためには、まず自分が正直になり、どんなことでも言うことが大切だと思いました。今考えると、自分が前に進むのが怖かったです。そして、自分がチャレンジすることを避けてきたのです。

自分が成人するまでに安心させよう。しかし安心させると言っても、副作用を克服するには時間がかかります。それに気が付かず焦っていました。何よりも必要なのは自分の身体、「命」なのだというところに心から気が付きました。行動しよう。そして自分がしたいことを本気でやろうと思うようになりました。

決してワクチンを推奨した人たちを許した訳ではありません。今も打たなければ良かったと思っています。でもこの出来事があって、本当に大事ななのは自分自身で、自分の行動に自信を持つことなのだ。それができれば私自身が心から笑顔になる。それが、家族に今すぐできる優しさだと考えました。失敗しても恐れずに行動すること。それが本当の優しさだと思いました。自分が心からの笑顔で笑える場面が今より増えれば、親の心配は減るのだと思います。

私の「守る」人たちは、私の元気な姿を見せることで守ることが出来る。私はそう信じています。



埼玉県のマスコット
「コバトンとさいたまっち」